35	1998	十代妊娠の意識調査について	金城国仁、大畑尚子、三浦耕子、井上格、宮貴子、上村哲、高橋慶行、村尾寛、稲福恭雄	沖縄医学会雑誌37(3)	会議録	十代妊娠例の意識の実態を把握する	沖縄県立中部病院、平成7年～8年、21例	面接調査	平均17.5歳、初めての性交、避妊方法、性教育の受けた経験など質問。結論として、知識不足や楽観的意識がうかがえ、啓蒙や教育が不可欠である。	思春期
36	2002	女子高校生の男女交際の意識と性・エイズ教育に対する意識に関する研究	下村美佳子、山本和代、木村龍雄、入谷仁士	教育保健研究12号	原著論文	高校生の性意識に即した性教育を実施するための基礎的資料を得る	K県内私立高校2校、女子343名、2000年6月、2001年1月	質問紙調査	有効回答330。高校生の性交に約7割肯定、性教育の時間数を3人に1人は「増やして欲しい」、また7割が「専門職にしてもらいたい」、妊娠したら女性は損、と7割近くが考えているが「産む」は3人に1人、高校生の妊娠は今後増加すると思うと7割近くが回答。	思春期
37	2002	栃木県における10代妊婦の現状	渡辺尚	栃木県産婦人科医報29(2)	報告	栃木県の臨まない妊娠、性感染症の予防対策にあたっての基礎資料を得る	平成13年7月～12月に県内産婦人科受診した10代妊婦、447例	質問紙調査	447例中107例は希望妊娠、322例は非希望妊娠、非希望の82%が中絶、16%出産。望まない妊娠を防ぐには確実な避妊が不可欠。性感染症予防にはコンドーム使用方法の徹底が重要。	
38	1999	当院における思春期の妊娠の現状	柴田浩之、竹内正人、桑原慶充、窪谷潔、篠原継男、粟田口康一、進純郎	日本産婦人科学会東京地方部会会誌48(4)	原著論文	医学的見地だけでなく、10代妊娠の社会的背景も検討する	平成8年～10年、葛飾赤十字産院での10代分娩50例、中絶30例、対照群20代以上の分娩50件	資料調査	10代妊婦の中絶率は対照群の3倍。産科的問題点は対照群と差はなく、社会的・家族的問題点を多くかかえていた。望まない妊娠を避けるためには学校レベルだけでなく、地域･家庭内レベルでの性教育、避妊指導が重要。	思春期～分娩期
39	2002	当院における10代出産についての検討	小林栄仁、山中薫、北田衣代、加藤治子	産婦人科の進歩54(3)	会議録	10代出産の医学的、社会的問題点について検討する	1991～2001年の10代出産	質問紙調査	抄録のみで結果内容は不明	
40	2000	10代妊娠と中期中絶	出口奎示	日本産婦人科学会関東連合地方部会会報37(2)	会議録	10代妊娠の中期中絶の手術経過の、他年齢層との比較検討	過去15年間254例中10代57例	資料調査	年齢、初・経産別などで成功率に有意差はなかった。強出血の発現頻度に関する知見も含め、10代妊娠の中期中絶は流産効果、副作用の点で他の年齢層と同様に実施しうることが明らかになった。	妊娠期
41	1999	10代分娩の取り扱いとその問題点の検討	藤原純、佐藤龍昌、斎藤こづえ、菅原英治、松田琢磨、佐藤健	産婦人科治療78(3)	原著論文	10代分娩が抱えている問題を把握する	昭和63年から10年間の十代分娩110例の情報を検討	資料調査	対象者は16歳以上であった。10代分娩の周産期学的リスクは20歳以上と差はないが、特に未婚例では適切な保健指導や社会的援助が不可欠だった。	妊娠期その他No.86と同様

資料2. 10代妊娠・出産女性に関する主な症例報告、活動報告、総説などの文献

文献分類:症例報告＝1　活動報告＝2　総説(解説)＝3　記事＝4　会議録＝5

文献No.	年次	タイトル	著者	雑誌名	その他　文献情報	内容の要約	調査内容時期
1	1996	10代の妊娠-実態と精神保健-	岩崎美枝子	精神保健研究42	1,2	家庭養護促進協会の取り組み（民間団体、兵庫・大阪、里親開拓）の経過と10代の子どもの自己決定援助のためにAPCC（Adlescent Pregnancy Crisis Center)開設（昭和63年）したなかでの援助・相談の実態と具体的な事例紹介。10代の妊娠が意味するものについて考えを述べる。	
2	1996	当院における若年妊産婦の看護	下地節子、平安香由美、田島律子、大城美那子、宇栄原克美、又吉理香子、豊里ハル	母性衛生37(3)	2,5	若年妊産婦も受け持ち制看護を試みた結果、信頼関係を深め、保健指導を充実することができ、個々のニーズにあった母子看護を行えた。	妊娠期
3	1996	若年出産と高年出産	西島光茂	周産期医学26増刊号	3	小タイトル：「若年出産と高年出産の定義」「年次推移」「妊娠中の問題点」「分娩時の問題点」「産褥期の問題点」	
4	1997	若年妊娠	吉田幸洋	医学のあゆみ 別冊	3	小タイトル：「若年妊娠とは」「若年妊娠の頻度」「若年妊娠に伴う問題点①婚姻状況②産婦人科初診時の妊娠週数③人工妊娠中絶④児の予後⑤社会学的問題」	
5	1997	思春期の妊娠とそのケア	荒堀憲二	小児内科29(4)	3　特集◆思春期の医療-基礎と進歩Ⅰ	小タイトル：「人工妊娠中絶数」「若年妊娠のもたらす諸問題①人口問題②周産期学的問題③社会的問題」「思春期妊娠への対応」	妊娠期
6	1997	当院における10代分娩症例について	多田羅裕子	思春期学15(1)	1,5	平成5年～8年。13例の検討。初診が29週、33週という例あり。妊娠中毒症4例、貧血3例、ｸﾗﾐｼﾞｱ5例、早産2例、帝切1例、出生体重は全例2500ｇ以上。育児上の問題：未婚、離婚、一般常識の欠如、未熟性など。	妊娠～産褥・育児期
7	1997	高校生妊娠の事例から検討される生と性へのアプローチについて	多田まゆみ、太宰由美子	思春期学15(4)	原著論文 パネルディスカッション	二事例（16歳、17歳）から見出された問題点の検討。妊娠中期以降の初診、将来の自己決定ができない、といった共通点の背景について考察し、性教育のあり方、相談事業に関して提言。	妊娠期
8	1998	宗教上の理由により人工妊娠中絶を行えない10代妊娠への対応について	高橋健太郎、栗岡裕子、尾崎智哉、岡田正子、上田敏子、宮崎康二	思春期学16(1)	原著論文 パネルディスカッション	医学的な人工妊娠中絶適応（ネフローゼ症候群）の18歳の妊婦が宗教上の理由（エホバの証人）で拒絶された症例の報告。	妊娠期
9	1998	当院における10代妊娠の一症例-その経過と結末-	岡田正子、小池秀爾、小池敏明、永田秀明、尾崎和彦、高橋健太郎	思春期学16(2)	原著論文 パネルディスカッション	妊娠～産褥期の経過を詳細に観察できた高校生の一例の提示と秀明会小池病院の11年間の若年妊娠、分娩の背景を述べている。初診時、平均すると80%は未婚、若年になるほど初診時期が遅いことが問題。教育のあり方、出生児の権利の保護などについて提言している。	妊娠～産褥・育児期

10	1998	妊娠30週に甲状腺クリーゼを発症した若年初産婦への援助	鈴木麻里子、齋藤範子、浅見久子	第29回日本看護学会集録「母性看護」	1	1事例の母体搬送されてから帝切、退院までの13日間の看護援助について報告。母子関係が危ぶまれるような若年初産婦には的確なキーパーソンを判断し、その人を含めた指導が必要。	妊娠～産褥期
11	1998	若年出産者への保健指導	リウ真田知子	ペリネイタルケア新春増刊	3	小タイトル：「若年妊娠とは」「思春期の特徴」「若年妊娠・出産者の抱える問題」「看護の対象としての若年出産者の生命力アセスメント」「若年出産者に対する看護の留意点」	
12	1998	産婦人科医からみた十代	松峯寿美	母性衛生39(3)	5 シンポジウム	産婦人科の医療現場での思春期のこどもの現状、産婦人科医の役割、家庭、学校、社会への期待などにつき述べる。	妊娠期
13	1999	10代妊産婦の心理社会的問題に関する一考察	有賀いずみ、馬場淳子、前田富士子、関島英子、斉藤益子	思春期学17(1)	1,5	平成9年～10年。初産婦2例（17歳、18歳）を分析したところ、問題は学業に集中できない、経済的な支援が必要、家庭環境に問題を抱えていること。看護者としては思春期健康教育として教育啓蒙活動も役割のひとつ。	妊娠～産褥・育児期
14	1999	10代妊婦の生活の実態-妊娠期の電話訪問を通して-	清水由紀子、関島英子、斉藤益子	思春期学17(1)	1,5	1998年。妊娠連絡表提出者10名に電話訪問実施。うち5名より情報収集し、5名とも「特に心配なことはない」とのことであったが、妊娠、分娩に関して正しい知識をもっているとはいえなかった。	妊娠期
15	1999	カイロ会議と思春期のリプロダクティブ・ヘルス／ライツ	芦野由利子	思春期学17(3)	3　特集◆思春期の性を考える：ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙの視点から	小タイトル：「健康と権利の新しい概念」「カイロ会議と思春期の若者」「望まない妊娠の予防と安全な出産･中絶」「暴力と性の搾取」「ＨＩＶ／エイズ」「若者の権利とリプロダクティブ・ヘルス／ライツ」「少子・高齢社会とリプロダクティブ・ヘルス／ライツ」	
16	1999	ヨーロッパにおける思春期の性	松本清一	思春期学17(3)	3　特集◆思春期の性を考える：ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙの視点から	小タイトル：「10代妊娠の増加とその対応」「ヨーロッパ諸国における性行動」「スペインの特異性」「ロシアおよび他の旧ソビエト諸国」「ヨーロッパにおけるリプロ・ヘルス」	
17	1999	アメリカにおける若者の性	北村邦夫	思春期学17(3)	3　特集◆思春期の性を考える：ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙの視点から	小タイトル：「10代の若者たちのセックス」「性交頻度は増加」「晩婚化」「セックスする10代」「10代のセックスの特徴」「意図しない妊娠とＳＴＤの予防・リスク」「セックスパートナーが多ければリスクが高まるのは当然である」「予防のむずかしさ」「計画性」「避妊やＳＴＤ予防のための手段を入手する」「性交経験のある若者の避妊法」「最初の性交でどの避妊法を選択するか」「現在の避妊法の利用について」「避妊できるだとうか」「ＳＴＤ」「10代の妊娠」「妊娠率は減少傾向」「Ｃｏｍｐａｉｇｎ　Ｆｏｒ　Ｏｕｒ　Ｃｈｉｌｄｒｅｎ（ＣＦＯＣ）」	
18	1999	衛生統計からみた思春期	宮尾克、渡辺智之	思春期学17(4)	原著論文 パネルディスカッション	愛知県の思春期衛生統計から若年出産の問題と主要死因の推移につき検討。	思春期
19	1999	15歳の若年者に発症し経膣的に排出した胞状奇胎の1症例	設楽芳宏、佐藤栄寿、松浦亨	産婦人科の実際48(1)	1	若年者の胞状奇胎率は25～35歳に比較し高い。性交経験を否認していた高校生だったために精査を要した。若年者への対応には羞恥心なども考慮した慎重な対応が重要。	妊娠～産褥・育児期

20	2000	望まない妊娠をした若年初産婦の分娩前教育	藤原ゆかり	小児看護 23(12)	1	17歳の望まない妊娠をした事例に39週より毎日保健指導を実施した経過を、プロセスレコードにより場面再構成し、「児への愛着」の援助につき報告。	妊娠～分娩期
21	2000	当院における思春期妊娠の検討	田中静代、河野美江、戸田稔子	思春期学 18(1)	2,5	1993-1998、松江生協病院。思春期妊娠の臨床的検討。妊娠中、自己決定をうながすｶｳﾝｾﾘﾝｸﾞを実施。77例中37例中絶、27例分娩。避妊せずが60例。既婚者3例、未婚のまま3例。思春期妊娠では避妊法の知識が不徹底、受診が遅れ中期中絶が多く、望まぬ妊娠を反復することが多い。	妊娠～産褥期
22	2000	若年妊娠の親となる過程への援助-14歳初産婦の事例を通して-	草刈美穂、長南記志子	思春期学 18(1)	1,5	14歳（中学2年生）の事例報告。26週初診。実父母の動揺が激しかった。本人、家族への妊娠中の育児体験が母性性の形成と家族支援能力を引き出すのに役立った。	妊娠期
23	2000	若年妊娠における親役割取得へ向けてのアプローチの1事例-発達課題的視点を含めて-	塚本美智子、水谷芳江、小川淳子、小泉由貴美、本山博恵	思春期学 18(1)	1,5	生活していく社会環境が重要な位置を示す。親役割取得、発達課題達成のためにも不一致体験を回避し予期的援助が必要。	？
24	2000	プライマリケアにおける思春期女性の診かた	目崎登、村井文江	治療82(7)	3　特集◆総合的な女性の健康をめざして	Summary：思春期女性の診療に際して必要な産婦人科疾患に関連する注意点①身体発育状態は性機能の状態と関連するので必ずチェック②婦人科疾患の2/3は月経異常③続発性無月経、機能性子宮出血、月経困難症が多い④摂食障害・食行動異常に注意⑤性交経験あり→妊娠、ＳＴＤを勘案	思春期
25	2000	若年・高齢妊娠	大濱紘三、三好博史	産婦人科の実際 49(11)	3　特集◆OB/GYN長期診療のﾋﾟｯﾄﾌｫｰﾙ-その予防と対策-	Ⅱ．若年妊娠　小タイトル：「妊娠中および分娩時の異常」「若年妊娠の問題点」	
26	2000	妊娠・出産・育児に悩む10代の女性に対するサポートと養子縁組-最近4年間　環の会に相談を寄せた32例の10代のケースの内訳と経過-	横田和子、宮内夏子、星野寛美	母性衛生 41(3)	1,5	環の会（第2種福祉事業：東京都）の活動のなかで平成8年から4年間の10代のケース32例(平均16.3歳）の報告。相談理由は31例が家庭環境の問題。30例が養子縁組、2例が自身で子育てとなった。自身の子育てケースは増えつつある。	妊娠～産褥・育児期
27	2000	若年者の妊娠の実態～当院の受診者、5年間の統計から～	河野美代子	ヘルスカウンセリング 2(6)	2，3 特集◆ｾｸｼｭｱﾘﾃｨとかかわるﾍﾙｽｶｳﾝｾﾘﾝｸﾞ	河野産婦人科クリニックの5年間の統計を含めて若年者の妊娠について述べる。小タイトル：「当院の10代の受診者」「10代の妊娠」「人工中絶にあたって」「小学生の妊娠」「中学生の妊娠」「高校生の妊娠」「10代の避妊」。	思春期 同ｸﾘﾆｯｸ10年報告 No.59
28	2000	若年妊娠の支援対策	長池博子	思春期学 18(4)	3 ワークショップ 若年妊娠の支援対策	人工妊娠中絶の法律説明、妊娠初期・中期・後期の対応の違い、を解説。未成年者の親の福祉を考え、戸籍に関する法的改訂を要望。	妊娠期

29	2000	高知県における若年妊娠実態調査から考える	岡田耕輔	思春期学 18(4)	3 ワークショップ 若年妊娠の支援対策	高知県の人工妊娠中絶対策ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄによる実態調査の報告とこれからの取り組みを解説。自記式質問紙で24歳以下の妊産婦552名を対象。妊娠の結末には婚姻状況が影響。性教育が避妊に結びついていない。意図しない妊娠･出産で親になることに戸惑いや不安が多い。妊娠・避妊の女性への配慮不足。中絶後の心理的フォローの不足などが明らかになった。	妊娠期
30	2000	養子縁組に関する支援について	菊池緑	思春期学 18(4)	3 ワークショップ 若年妊娠の支援対策	「養子と里親を考える会」の調査研究の一部紹介。ﾀｲﾄﾙ：減少する家庭裁判所の未成年養子、普通養子制度と特別養子制度の違い、誰が養親になっているのか、特別養子縁組における斡旋の有無、養子斡旋機関、なぜ養子に出すのか、母の年齢と理由、若年妊娠への養子縁組の支援。	育児期
31	2000	未婚妊婦に対する周産期母子保健指導	野末悦子	周産期医学 30(2)	1,3 特集◆周産期の母子保健指導-母性編	川崎市医師会の調査および川崎協同病院ﾒﾃﾞｨｶﾙ･ｿｰｼｬﾙﾜｰｶｰが対応した症例を通して問題点を解説。未婚、若年妊婦の周産期保健指導は、生活指導とカウンセリングが重要視され、未婚妊婦サポートシステムが公共的サービスとして考えられる。付記としてタバコや薬物乱用、性感染症も重視すべき	妊娠期
32	2000	若年女性に対する周産期母子保健指導	久保武士	周産期医学 30(2)	3 特集◆周産期の母子保健指導-母性編	小タイトル：「頻度」「若年妊婦の社会的背景」「若年妊娠の医学上の問題点」「周産期母子保健指導の要点」あらゆるリスクの原因は主として周産期管理が不十分なこと。しかし厳密にはそれ以前の対応が問題。	妊娠期
33	2001	養育機能不全（親準備性の不足）と子育て支援	前川喜平	周産期医学 31(6)	3 特集◆周産期の社会的リスクとその支援	小タイトル：「養育機能不全（親準備性不足）とは」「10代の妊娠･出産に対する子育て支援」・・・対応するスタッフがせめてポジティブにとらえ、サポートしようという心がけをもつこと。妊娠中は積極的に情報を得ること。分娩、産後は児への行動や夫婦にサポート関係がみられるか観察し、ふれあいの増強を行う。退院後は家庭訪問、24時間連絡方法を教えるなど頻回に態度を観察する。	妊娠期～育児期
34	2001	若年妊娠の社会的背景とその支援	片桐清一	周産期医学 31(6)	3 特集◆周産期の社会的リスクとその支援	小タイトル：「若年妊娠の定義」「若年妊娠の現状」「若年妊娠が集まる産婦人科施設」「若年妊娠の結末」「若年分娩の問題点」「小・中学生の妊娠の問題点」「若年妊娠の予防策、妊娠後の対策」「若年妊娠例の取り扱いの実際」	妊娠期 No.39と類似
35	2001	若年妊婦の一事例から受け持ち制導入効果に関する考察	寺嶋千晶、山下加代	母性衛生 42(3)	2,5	17歳の妊婦1名に受け持ち制を導入し、受け持ち制でない対象群17名と独自の育児行動ｽｺｱで比較。早期の受け持ち制導入で母子相互作用促進効果があった。	妊娠～産褥期
36	2001	若年妊産婦の特性をふまえた援助について	大島美佐恵、前山直美、萩庭一元、大塚博光、石塚文平	母性衛生 42(3)	2,5	若年妊産婦の特性をふまえた援助について報告する。	妊娠～分娩期
37	2001	今後の性教育を考える-思春期クリニックの現状から-	瀬戸致行	思春期学 19(3)	臨床報告	著者の思春期クリニックにおける平成4年～11年の検討、今後の性教育の私見。患者の内訳、性交経験、妊娠例数、人工妊娠中絶数などの実態を報告し、「性教育をどこでするか」「学校での性教育のあり方」「社会での性教育の取り組み」などの意見を述べる。	思春期

38	2001	リプロダクティブヘルス／ライツ：その役割を担う看護職	末原紀美代	看護53(4)	3，4 シンポジウム	福井でのシンポジウムでの発表記事。小タイトル：「望まない妊娠、性感染症、２つの悲劇を味わわないために」「避妊教育は性感染症とタイアップして」	思春期
39	2001	思春期妊娠	片桐清一	小児内科 33	3	小タイトル：「定義」「現状」「思春期妊娠の結末」「問題点」「防止策、妊娠後の対策」「思春期妊娠例の取り扱いの実際」「おわりに」	文献No.34と類似
40	2001	超低出生体重児を出産した14歳の母への退院指導を通して-十代女性の妊娠出産について考える-	杉原和子、宇津木正代	小児保健研究60(2)	1,5	母を中心とした家族への指導および地域のフォロー体制が重要。	妊娠～分娩期
41	2001	17歳の若年妊産婦の受け持ち看護	小安美恵子、菱沼キン子、斎藤照代	助産婦雑誌 55(10)	1	妊娠～産後1ヶ月まで受け持ち母子看護を行った結果を報告。事例17歳。不安の軽減、父親への働きかけ、家族などの社会的支援に効果的だったと考える。	妊娠～産褥・育児期
42	2001	若年妊娠	海野信也	臨床婦人科産科 55(10)	3	小タイトル：「出生数と出生率の年次推移」「20歳未満の妊娠における出生と人工妊娠中絶の年次推移」「若年妊娠の問題点」	妊娠期
43	2001	10代妊産婦の心の変化と私達の役割-当院における支援を通してみえてきたもの-	松浦洋栄、伊藤悠子、井田艶子、権幸枝、高村美子、田中文平	心身医 41(7)	1,5	10代の妊産婦の対応にきめ細かい管理を行ってきたところ、最近分娩を希望した早期受診がみられるようになってきた。具体的事例を供覧して支援について言及したい。	妊娠～産褥期
44	2002	これからの思春期看護	前原澄子	産婦人科治療84(2)	3　特集◆これからの思春期ケア	小タイトル：「疾患をもった思春期の看護」「母性準備期としての看護」「家族看護の視点」	思春期
45	2002	10代の妊娠・出産とその問題点	竹村喬、早田憲司、末原則幸、水谷隆洋	産婦人科治療84(2)	3　特集◆これからの思春期ケア	小タイトル：「人口動態からみた10代の妊娠」「母子医療センターにおける10代の妊娠」「自験例からみた10代の妊娠・出産の問題点」「10代の妊娠・出産への対応」	妊娠～分娩期
46	2002	思春期における妊娠前の保健指導	竹村喬、水谷隆洋、甲村弘子、小山田浩子	産婦人科治療85(3)	3　特集◆これからの周産期医療	小タイトル：「10代妊娠と問題点」「若年者と性」「若年者と喫煙」「若年者のａｎｔｅ－ｐｒｅｇｎａｎｔ　ｃａｒｅ」	思春期
47	2002	母親になる過程を支えるための助産婦の役割	松岡恵	周産期医学 32(1)	3　特集◆周産期とこころのケア	小タイトル：「妊娠中の女性の達成課題」「妊娠初期の女性のとまどい」「妊娠・出産期に調整が必要な内容」「妊娠初期の調整作業」「妊娠期の助産婦の役割」「母親役割適応のハイリスク群」「こころのケアにおける助産婦の専門性」「母親としてのｱｲﾃﾞﾝﾃｨﾃｨの獲得に要する期間」「出産後6ヶ月以降の女性に対するケア」「妊娠期から育児期までの継続ケアシステムの必要性」	妊娠期～育児期
48	2002	若年者の妊娠に多い不利な合併症	合阪幸三	周産期医学 32(2)	3　特集◆若年者のante-pregnant care	小タイトル：「母体側のリスク」「胎児・新生児側のリスク」「社会的、精神的リスク」正しい性に対する知識の普及が第一だが、望まずして母となった患者に対する総合的なケアが最も大切。	妊娠～分娩期

49	2002	若年者の妊娠に対する支援	大久保さつき	周産期医学32(2)	3　特集◆若年者のante-pregnant care	小タイトル：「若年者の性活動と妊娠の状況」「若年者の性と妊娠に関する相談」・・・日本家族計画協会電話相談主訴も含めて紹介	思春期
50	2002	若年妊娠の問題点	佐藤秀平	周産期医学32(2)	3　特集◆若年者のante-pregnant care	小タイトル：「若年妊娠の現状」「症例」・・・14歳、17歳、19歳の4例紹介「医学的問題と社会的問題への対応」「若年妊娠の中絶の問題」	妊娠期
51	2002	10代の妊娠および人工妊娠中絶	林謙治	周産期医学32(4)	3　特集◆健やか親子21と周産期医学-母性医療･保健の立場から	小タイトル：「近年の10代の人工妊娠中絶と性行動」「コミュニケーションとしての性行動」「若者の性行動の背景」「家族関係と青少年の性」「性問題を含む青少年問題の拡大再生産に歯止めをかけるｿｰｼｬﾙ･ｷｬﾋﾟﾀﾙの形成」	思春期
52	2002	人種別にみた思春期女性の避妊	石井明治	産婦人科の世界54(8)	3　カレント インフォメーション	Raineら：人種間での思春期女性の避妊方法と予定外妊娠について習慣、環境、文化的因子を含めて統計学的な立場から検討。12～19歳604名対象。妊娠の希望は人種間で差異なし。避妊方法73%はバリア法、黒人がやや多い。妊娠希望の頻度は避妊方法と関係あり（ﾎﾙﾓﾝ使用者に妊娠希望者はいなかった）。Darrochら：先進国のうちｱﾒﾘｶはSTDの頻度が非常に高い。20歳未満の妊娠率が高い。避妊を行わない頻度が高い・・・などを報告している	思春期
53	2002	北九州市の産婦人科病院における10代妊娠（中絶・分娩）の現状と看護職のかかわりについて	土谷朋美、山口ともみ、村上規百、山田薫	Quality Nursung 8(11)	1,2　特集◆若者の性を考える：北九州市におけるネットワークづくり	エンゼル病院における10代妊娠の現状(1998-2001)および看護支援について症例も含めて報告。10代の出産する比率は増加傾向。リスクは医学的な面ではなく社会・心理的側面。自立支援が必要。医療機関と地域とのサポート図を示している。	妊娠期
54	2002	年齢　若年・高齢	遠藤力	母性衛生43(3)	5 シンポジウム	１０代妊娠の問題点：早産・鉄欠乏性貧血・感染症などは妊娠管理を受けていれば増加する傾向はない。心理的・精神的な未熟、経済面の教育・支援が重要。	妊娠期
55	2002	若年者の妊娠分娩について～特に13才の中学生症例を経験して～	近藤綾子、石崎淳子、小森田華子、畑瀬哲郎	母性衛生43(3)	1,5	中高生の妊娠をとおして問題点をあげ検討する。医師・保健師・助産師・看護師・教師・家族などの協力、指導が必要。	妊娠期
56	2002	中学生の妊娠分娩	片桐清一	思春期学20(1)	1,5	女子中学生の妊娠・分娩の問題点の整理を、症例紹介し述べている。中学生への徹底した教育、指導を要望。	妊娠～分娩期 No.85同様
57	2002	両親学級・夫立会い出産を経験した10代夫婦の事例検討	森朋子、遠藤優子、村岡光恵、高木耕一郎、黒島淳子	思春期学20(1)	1,5	妻17歳、夫18歳の症例報告、10代妊娠・出産の支援には、妻のみならず夫への積極的なかかわりが、受容と親役割獲得に効果的。	妊娠～分娩期
58	2002	母性意識の発達支援に関する一事例-母性意識の未発達な19歳母親へのアプローチを試みて-	中島智恵子、浅野みゆき、今瀬真樹、荒堀憲二	思春期学20(1)	1,5	妊娠24週から担当助産師が継続的にアプローチした妊婦の母性意識の変化をコーエンの「母性心理発達モデル」を用いて検討。継続した、背景をよく知った支援で母性意識を発達したが、新生児のシグナルが急速に発達させる因子となった。	妊娠～産褥期

59	2002	思春期女子の健康管理	河野美代子	からだの科学225	2，3	河野産婦人科クリニックの10年間の統計を含めて思春期の健康管理について述べる。小タイトル：「当院における十代の受診者」「十代の月経のトラブル」「十代の妊娠」「からだや性の悩み」。義務教育からの避妊も含めた性教育を望む。	思春期 同ｸﾘﾆｯｸ5年報告No.27
60	2003	家庭訪問から事業化へ　個別援助から思春期講演会開催の事例をとおして	金子仁子、渡邉輝美	保健婦雑誌59(1)	2　特集◆もう家庭訪問で悩まない	事例より学校を含めた地区のなかでの「性についての関心を高めていくことの必要性」を感じ、地区組織活動へ発展、検討会を経て講演会開催へ至った経緯紹介。家庭訪問を地域づくりへつなげる方法を考察している	思春期
61	2003	諸外国におけるリプロダクティブ・ヘルスへの取り組み	池上清子	公衆衛生67(2)	3　特集◆公衆衛生が進めるリプロダクティブヘルス／ライツ	小タイトル：「アフガニスタンの妊産婦死亡」「メキシコにおける十代の望まない妊娠」「ネパールの中絶禁止法の改定」「アフリカのフィスチューラ（膣漏）」「米国の政治とＲＨ（リプロダクティブヘルス）への支援」	
62	2003	「うち、産むねん」母になることを選ぶ十代の少女たち	社納葉子	月刊　部落解放	4　連載（計10回）	大阪市芦原病院の十代妊娠、出産の現状、西成区、浪速区とで行政主体の子育てサークルの誕生経緯、事例インタビューなどの記事。連載の表題：「うち、産むねん」「子育てサークル「ころころクラブ」」「産まれてくれてありがとう」「学校に戻りたい。ずっと続けられる仕事に就きたいから」「自分のことを好きになった」「私のことを思ってくれるのが、すっごいうれしい」「前向きに生きること」「高校を出ていなくてもちゃんと育てられたらいいねん」「みんなを変えてきた”ころころくらぶ”」	妊娠期～育児期
63	2000	10代の妊娠	黒島淳子	産婦人科の世界52(5)	3　特集◆Pill解禁余聞	小タイトル：「各種10代妊娠の統計 1)日産婦・生殖内分泌委員会：我が国における思春期妊娠第4回調査報告から 2)東京都性教育研究会報告などより 3)人口動態統計より 4)当大学における集計」「外国の数値」「10代妊娠の問題点」「おわりに」のなかで、10代の人たちは少しづつ考え方が変わってきているのか、妊娠してしまっても人工妊娠中絶がやや減少し、出産しようとしている人が増えている。ただし簡単に学業を中断している様子もうかがえる、としている。	思春期
64	2000	性教育のあり方	松本清一	臨床婦人科産科54(9)	3	小タイトル：「リプロダクティブ・ヘルスと性教育」「思春期婦人科外来での性教育」「婦人科疾患に対して」「妊娠に関して 1.妊娠を疑って訪れた者に対して 2.人工妊娠中絶の問題に関して 3.避妊を希望する者に対して」	思春期
65	2000	若年出産者への看護展開	田中敬子、奈良めぐみ、柳田君子、安保初美	秋田県農村医学会雑誌45(2)	1	16歳初妊婦の入院後の看護目標と、援助に必要だったことにつき考察を述べる	妊娠～産褥期？
66	2000	若年出産者への看護展開（第2報）	稲垣祥子、広林真由美、杉渕真紀子	秋田県農村医学会雑誌46(1)	1	17歳初産婦の入院後の看護目標と、援助に必要だったことにつき考察を述べる	妊娠～産褥期？
67	1999	子癇発作で妊娠がわかった1例	持田晋輔、三浦憲豊、堀真也、石部裕一、永井小夜、玉川竜平	麻酔と蘇生35(3-4)	1,5	18歳、嘔吐、意識消失で救急外来へ搬送され、34週相当の胎児がおり心拍低下したため緊急帝王切開となり、術後経過良好で15日目に退院。	分娩期

68	1998	若年初産婦への継続的援助　家族ｻﾎﾟｰﾄが得られにくいｹｰｽとかかわって	河原井吉枝	茨城県救急医学会雑誌22号	1,5	18歳、嘔吐、陣痛開始で搬送され、帝王切開となった。その入院後受け持ちとしてかかわり、適切なサポートが受けられるよう、家族援助者の確保、地域への働きかけ行い、良い結果を得た。	分娩～産褥期
69	2001	若年出産例における親子関係確立への援助　自宅分娩後放置された２症例の看護を経験して	鈴木悦子、深谷悠子、小林友美、青柳ひとみ、佐藤優子、小林美幸、大野美津江	茨城県救急医学会雑誌24号	1,5	15歳と17歳のそれぞれ望まない妊娠で誕生した児が搬送されたＮＩＣＵで、その後の親への必要な援助について考察。家族が児を受容するためには退院後の問題まで含めてサポートすることが重要。	産褥期
70	2002	母体が若年齢（20歳未満）のＮＩＣＵ入院症例の検討	奥村光祥、藤永英志、百井亨	日本新生児学会雑誌38(2)	1,5	1997年から5年間にＮＩＣＵに児が入院した20歳未満の母親15例の症例報告。極低出生体重児（4例）や仮死に起因する疾患の割合が高い。母のみで養育している例も多く（5例）退院後の育児支援体制確立が必要。	育児期
71	2002	平成13年度社会的援護を要する人々への援助3例	冨士川浩子、渡辺由美、照井八重子	大阪府済生会中津病院年報12(2)	1	事例３として「実子「特別養子法」にかかわって－養子縁組した子－断想」とあり、15歳で出産した事例を通して「特別養子法」について考察している。	育児期
72	2002	十代の妊娠と性教育	河野美代子	日本小児科医会会報24号	2，3	河野産婦人科クリニックの10年間の統計を含めて十代の妊娠と性教育について述べる。妊娠に関しては小学生、中学生、高校生それぞれの詳細な内訳を示す。避妊があまりにもお粗末であること、コミュニケーションの不足、大人の性意識が問題であることなど。	思春期　同ｸﾘﾆｯｸ5年報告No.27、10年報告No.59
73	1998	当院における十代妊娠の傾向	村上裕美、小池秀爾、岡田正子、他	福山医学8号	1,5	No.74に同じ	No.74の会議録
74	1998	当院における十代妊娠分娩の一例	村上裕美、小池秀爾、岡田正子、他	福山医学8号	1	過去10年間、178例の十代分娩があった。その動向をのべ、また17歳で里子に出した事例を通し、看護のあり方を考察。よき相談相手となり、チームで連絡を密にとる、など。	妊娠～産褥期
75	1997	当科における十代の妊娠・分娩に関する検討	平沢晃、舛本暢生、北岡芳久、佐々木宏輔、白石悟	日赤医学49(1)	5	平成4年から5年間の十代分娩82例の情報を検討。初診時期の遅れ、妊娠中毒症合併妊娠の割合が高い（61%）などの特徴あり。適切に管理するためには妊娠、避妊の正しい知識の啓蒙、家庭･学校の協力、健診の徹底､ｹｰｽﾜｰｶｰや保健師との連携などが重要。	妊娠期
76	1997	当院における10代の分娩の検討	藤原純、佐藤龍昌、斎藤こづえ、菅原英治、松田琢磨、佐藤健、須田秀利	日赤医学49(1)	5	平成4年から5年間の十代分娩53例の情報を検討。帝切率、早産率は20歳以上と有意差なし。婚姻状況など、特に16,17歳には家庭・社会的に問題になるケースが浮き彫りにされた。	妊娠期No.77第2報
77	1998	当院における10代の分娩の検討（第2報）	藤原純、佐藤龍昌、斎藤こづえ、菅原英治、松田琢磨、佐藤健、西谷巌、諸井愛恵	日赤医学50(1)	5	昭和63年から10年間の十代分娩110例の情報を検討。10代分娩の周産期学的リスクは20歳以上と差はないが、特に未婚例では適切な保健指導や社会的援助が不可欠だった。	妊娠期No.86同様

78	2002	諸外国における若者の望まない妊娠、エイズおよび性感染症対策	劔陽子	Quality Nursung 8(11)	3　特集◆若者の性を考える：北九州市におけるネットワークづくり	対策が効を奏している諸外国の実際の対策の紹介。特にアジアにおける若者向け対策の紹介。ベトナム社会主義共和国：ﾎｰﾁﾐﾝｼﾃｨ、タイ王国：ﾁｪﾝﾏｲそれぞれの若者のためのエイズ事情、対策など具体的に紹介し、日本でも若者自身で立ち上がることを期待。	思春期
79	2000	当院における若年妊婦の周産期管理について	永吉裕三子、小山秀樹、西村宏祐、宮村伸一、市丸俊三、清田祐史	日本産科婦人科学会熊本地方部会雑誌44号	5	1992年から1999年の39例につき検討。妊娠中および分娩経過・分娩様式に特に異常はなく、外来での適切な指導、症例に応じた入院加療により、良好な産科学的予後に到達できる。	妊娠～分娩期
80	2002	18歳以下の母親から出生した当科入院例についての検討	木多村知美、藤田英寿、定方久延、住田由美、五十嵐健康、臼倉幸宏	日本未熟児新生児学会雑誌14(3)	5	1991年1月～2002年8月までに出生し、静岡県立こども病院新生児科に搬送入院となった12症例。妊婦健診を受けていたのは6例、帝切4例、低出生体重児8例など、妊娠分娩の知識、ケア不足のまま分娩に至ることが多く、注意深いフォローが必要。退院後の通院も社会的サポートなければ困難。	妊娠～産褥期
81	1999	若年妊婦とその看護	椎名加代、米嶋美和、淀縄きみ子、秋山れい子、牧野浩充	茨城県母性衛生学会誌19号	1	14歳の若年妊婦に初診30週よりかかわり、サポートが期待できないパートナー（18歳）である状況の中でどのようにアプローチすべきであったか考察している。本人は出産を望んでいたし、パートナーの母がキーパーソンとなり非常に協力的だったが、父性意識を促進させていくべきだった。	妊娠～産褥期
82	1998	精神的に不安定な若年妊産婦の母親役割習得のための援助の一考察　ｴｺﾞｸﾞﾗﾑから思春期の心理を考える	岩田真美、岩永信子、山田新尚	岐阜県母性衛生学会雑誌21巻	1,5	20週から受け持ち助産婦を決め交換日記をするとともに、援助を考えるためにｴｺﾞｸﾞﾗﾑで評価した。客観的データ分析を行ったことは繊細な精神状態を把握することにつながった。	妊娠～産褥期
83	2001	若年出産（学校と地域の連携）何故若い母親は泣いたのか　事例から学ぶもの	田邉幸子	栃木母性衛生28号	3	養護教諭としての経験と小山市の取り組みについて紹介。妊娠不安で相談に来る事例の共通点は1．家庭内不和　2．親子関係に問題あり（母子関係希薄）　3．大人に指図されたくないという意識が強い生徒が多い	思春期、妊娠期
84	1999	思春期外来を通してみた十代妊娠	伊野田法子	栃木母性衛生26号	1,3	学校における性教育の時期につき検討することを目的に、大草ﾚﾃﾞｨｽｸﾘﾆｯｸ思春期外来の平成9年度状況、症例と日本産婦人科学会の思春期をめぐる諸問題検討小委員会による「我が国における思春期妊娠第4回検査報告」より、性教育は高等学校で行うべきで、その時期は高校1年生の冬休み前（2学期）から遅くも高校2年生の夏休み前（1学期）が適当と考える。内容に正しい避妊法、性感染症、人工妊娠中絶の方法や危険性も取り入れ、専門家が行うほうがよい。	思春期
85	2002	中学生の妊娠分娩	片桐清一	日本産科婦人科学会東北連合地方部会報49号	1,5	過去10年間の女子中学生の妊娠・分娩の症例を紹介し問題点を述べている。中学生への徹底した教育、指導を要望。	妊娠～分娩期 No.56同様
86	1999	10代分娩の取り扱いとその問題点の検討	藤原純、佐藤龍昌、斎藤こづえ、菅原英治、松田琢磨、佐藤健	日本産科婦人科学会東北連合地方部会報46号	5	昭和63年から10年間の十代分娩110例の情報を検討。10代分娩の周産期学的リスクは20歳以上と差はないが、特に未婚例では適切な保健指導や社会的援助が不可欠だった。	妊娠期 No.77と同様

87	1998	若年妊産婦の特性をふまえた援助について看護と地域との連携ー母性意識の促進を試みてー	村越セツ子、金沢紀子、目黒悦子、深谷順子、尾崎和子	神奈川母性衛生学会誌1(1)	1,5	14歳で出産を希望した事例を通して看護と地域との連携について検討した報告。	妊娠～産褥期
88	1999	未成年者の望まない妊娠･分娩をとおしての一考察	石塚真姫子、大友敏子、平木由美子	神奈川母性衛生学会誌2(1)	1,5	18歳で出産、乳児院に預けることを決意していたが、切迫早産での入院中の心理的考察、産後乳児院に通いながらの育児体験をするなかで母性意識を高揚し続け、引き取って育てる道を模索するケースを紹介する。	妊娠～産褥期
89	2000	10代の妊産婦の背景と助産婦の関わり	伊藤晴美、山口秀子、成水礼子	神奈川母性衛生学会誌3(1)	5	30例のカルテからの情報より生活背景、社会背景を検討した。生活リズム、食事、喫煙など育児期が不安となる結果が多い。抱える背景を知り、今後、健全な親性が発達していけるように関わる必要がある。	妊娠期
90	2002	10代妊産婦の育児状況について訪問内容および小児科受診内容からみて	山口秀子、伊藤晴美	神奈川母性衛生学会誌5(1)	5	平成12～13年、小田原市立病院で分娩した19例の院外施設の訪問結果と小児科受診内容をみた。訪問結果、受診内容共通の問題点としては体重増加不良、皮膚のトラブルなどがあげられ、院内、外の循環する継続的指導、児の成長にあわせた産婦人科から小児科へのｽﾑｰｽﾞな情報提供とﾌｫﾛｰｱｯﾌﾟの移行を柱とした支援体制が必要。	育児期
91	2002	若年妊婦への看護援助　保健指導の内容と導入時期の検討	新井陽子、及川美穂	神奈川母性衛生学会誌5(1)	5	1998年～2000年、北里大学病院で出産した若年妊婦10名の看護記録をもとに実施された保健指導と妊婦および家族の妊娠受容状況を検討。妊娠を受容していることが分娩や育児の準備、母子関係の確立に重要で、そのための介入や家族調整が先決。	妊娠～産褥期
92	2002	NICUより転院となった超重症児をもつ未成年母親との電子メールを活用した関わり	服部礼佳、小林正美、大坪愛、市川あゆみ、権野さおり、五家邦子、穴田博美、大山宣子、平岩里佳、樋口和郎、神谷齊	日本重症心身障害学会誌27(2)	1,5	ペナ・ショーカー症候群Ⅱ型で生後7ヶ月女児をもつ18歳母親とのｅメールの内容から関係を振り返る。1対1の関わりから、医療スタッフ、他患者の家族へひろがり、母親の自信につながった。常に医療者であることを忘れず関わる事で、この事例では効果的であった。	育児期
93	2000	ＳＴＤ・ＡＩＤＳの教育の現在と性教育の改善・変革	松岡弘	教育医学46(1)	3 シンポジウム	米国では1997年のデータでは高校生の性交体験率は減少し、4人以上のセックスパートナーのいる者も減少し、コンドーム使用率は上昇している、などのデータを示し、政府による節制教育が効を奏していると述べる。日本では「古い」という風潮があり遺憾である、と述べる。	思春期
94	2000	若年妊娠に対する養子縁組を選択肢に含んだカウンセリングの模索ー環の会に相談を寄せた32例の10代のケースの内訳と経過ー	星野寛美、横田和子	日本産科婦人科学会関東連合地方部会会報37(3)	1,5	平成8年から4年間に当会に相談を寄せた10代ケース32例の内訳と経過報告。10代の相談例は増加傾向にあり、養子縁組を希望するケースが大多数であるが、ひとり親となってでも育てようとするケースは増えつつある。この現状を理解し、カウンセリングを行うことが必要。	妊娠～育児期
95	1997	里帰り分娩・多胎・若年出産	南部春生、堤邑江	Neonatal Care 1997秋季増刊	3　◆母親へのｍｏｔｉｏｎａｌｓｕｐｐｏｒｔ	不安な妊婦、切迫した母親のおかれた状態につき述べる。小タイトル：「当院における里帰り分娩・多胎・若年出産数の年次推移」「里帰り出産への対応」「多胎出産への対応」「若年出産への対応」。それぞれに事例紹介あり。若年出産のケースではＭＳＷの精力的なかかわりが重要だった。母親の抱える問題は不安のみが先行すると考えて臨むのが今日的な支援の考え方である。	妊娠～育児期

96	1998	十代の妊娠	片桐清一	産科婦人科治療76(4)	3　特集◆思春期のヘルスケア	青森県の状況を含んで解説。小タイトル：「十代の妊娠の現状」「十代の妊娠が集まる産婦人科施設」「十代の妊娠の結末」「十代の分娩の問題点」「女子高校生の妊娠の割合」「女子高校生の避妊の知識」「小・中学生の妊娠の問題点」「十代の妊娠の予防策、一般的な対策」「十代の妊娠の取り扱いの実際」	思春期
97	1996	若年妊娠の現況と問題	目崎登、小谷衣里、佐々木純一	産婦人科の世界48(9)	3　特集◆出産年齢をめぐる話題	茨城県の状況を含んで解説。小タイトル：「若年妊娠の現状」「若年妊娠の背景」「若年妊娠の結末」「若年妊娠の諸問題」「性に関連しての教育」	思春期 妊娠期
98	1996	若年妊娠の産科学的問題点	渡利英道、藤本俊郎、藤本裕子、藤本征一郎	産婦人科の世界48(9)	3　特集◆出産年齢をめぐる話題	小タイトル：「母子保健統計からみた若年妊娠の問題点」「若年妊娠・分娩の分娩の産科学的問題点」「若年妊娠の妊婦健康診査時の留意点」	妊娠期 分娩期
99	2000	十代の妊娠とその予防ならびに対策	片桐清一	産科婦人科治療81(2)	3　特集◆思春期をめぐる諸問題	十代の妊娠の予防は「分かりやすい性教育」と「具体的で役に立つ避妊教育」をいかに効果的に行うかである。小タイトル：「最近の十代の性行動調査から」「わが国の十代の妊娠」「十代の分娩の問題点」「高校生に対する性教育・避妊指導」「性教育は役に立つか？」。筆者の行う性教育の方法の実際を含めて述べる。	思春期
100	2000	男女共同参画時代の性教育	玉田太郎	産科婦人科治療81(2)	3　特集◆思春期をめぐる諸問題	先進国の子どもの育て方、男女共生指標、思春期女子の妊娠、中絶などの統計からわが国における思春期性教育の方向を探る。小タイトル：「男女共同参画社会とは？」「ジェンダー開発指数とジェンダーエンパワーメント指数(GEM)」「子どもの育て方」「子どもの育て方対GEM」「子どもの育て方対10代妊娠率」「10代妊娠率対中絶率」	思春期

平成15年度厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）
分担研究「出産を可能にする環境整備に関する研究」

埼玉県における10代出産女性の支援事例調査

鈴木幸子　埼玉県立大学保健医療福祉学部
今井充子　埼玉県立大学保健医療福祉学部
村山陵子　東京大学大学院医学系研究科
伊藤悠子　芦原病院
金子由美子　川口市立芝西中学校
浅井春夫　立教大学コミュニティ福祉学部教授
湯澤直美　立教大学コミュニティ福祉学部助教授
渡邉好恵　さいたま市保健所

1．はじめに

1）問題の背景

「出産を可能にする環境整備に関する研究」として 14 年度の分担研究者である戒能[1]らはシングル・マザーに対する調査から①婚外子出産の決定には医療者の対応の影響が大きい　②親族を含めて周囲の協力が得られにくいが地域での援助が重要である。　③パートナーがいることを前提としたサービスでの疎外感　④行政窓口などでの偏見やプライバシー侵害　などの実態を明らかにし、さらにシングル・マザーの生活全般をとらえた具体的な支援策の必要性を提言している。

一方、出生数や出生率は低下の一途で、出産年齢は 20 代後半から 30 代が中心になり高齢化している。平成 2 年と 13 年を比較すると 20 代前半で出生数は 19.1 万人から 15.7 万人に減少しているが、10 代では 1.7 万人から 2.1 万人に増加している。10 代の出産は未婚や予定外出産が多くシングル・マザーの中でも育児が困難な集団であるといえる。10 代で出産した（妊娠中含む）女性は経済的困窮や、高校に在学中、10 代特有の価値観などから通常の母子保健サービスが受けにくい状況にあり、特別な支援が必要な対象である。

しかし、埼玉県を例に挙げると、事例的には保健師などが関わっている事例は多くあるものの、10 代出産女性向けの事業としての取り組みやそれに向けた準備は皆無であった。

今年度の課題である望まない（望まれない）妊娠の結果としての出産・育児を支援する具体的施策を検討するにあたって、対象の特性が比較的明確であり、育児困難度が高い 10 代の母親（非婚・既婚を含む）に焦点を絞って支援の実態を把握する。

その上で、育児支援策は親への支援策でもあり、若年で望まない（望まれない）妊娠をした女性（家族を含む）の支援という視点からの提言を行なっていきたい。

2）研究目的

本研究の目的は 10 代の出産女性に対する保健・医療・福祉分野の支援の実際から課題を見出すことである。

2．研究方法

1）対象：

・埼玉県内保健所および市町村保健センター（110 箇所）
・児童相談所（7 箇所）
・県内公立中学校および高校養護教諭（100 名）

2）調査内容：

平成 15 年 1 月から 12 月までの 1 年間に関わった 10 代で出産した事例の概要と支援の状況、(関わった事例の有無、10 代出産女性の年齢、属性、支援状況、本人とパートナー、家族の妊娠の受け入れ、同居家族、関わった他機関、パートナーの年齢、属性、支援した期間、支援した内容、苦慮した点、詳細なインタビューの可否など）

3）調査方法

自記式質問紙郵送法（留め置き）にて行なった。これらの調査を埼玉県で実施する理由は①研究者、研究協力者が情報が得やすくサービス展開の可能性の予測がしやすいこと、②児童虐待防止を重点施策にしていることからその関連で調査協力や、施策実施の可能性が高い　の 2 点である。

3．倫理的な配慮

調査研究の主旨を書面にて説明し、同意を得た者が回答した。回答は無記名で回収した。回答内容には個人を特定できる情報（個人名、住所など）は含んでいない。調査結果の公表については調査対象施設名、個人名、事例が特定できる個人情報などは公開しない旨を事前に書面で説明した。

3．結果

1）調査票回収率

・保健所・保健センター：配布数 110、回収数 73、回収率 66.4％
・児童相談所：配布数 7、回収数 6、回収率 85.7％
・中学・高校養護教諭：配布数 100、回収数 30、回収率 30.0％

合計 109 名から回答を得た。

2）10代出産女性の事例に関わったことが「ある」と答えた施設数と事例数

・保健所・保健センター：44 施設（60.3％）報告事例合計 100 事例
・児童相談所：6 施設（85.7％）報告事例合計 36 事例
・ 中学・高校養護教諭：5 名（13.6％）報告事例合計 5 事例

合計 141 事例を収集した。そのうち約 7 割は保健所・保健センターで関わっていた事例であった。

表1.報告事例数の内訳

種 別	実数(%)
保健所・保健センター	100(70.9)
児童相談所	36(25.5)
中・高養護教諭	5(3.5)
合 計	141(100.0)

表2.施設/個人毎の事例報告数

報告事例数	実数(%)
1	30(27.5)
2	11(10.1)
3	4(3.7)
4	3(2.8)
5	3(2.8)
6	1(0.9)
7	1(0.9)
8	1(0.9)
10	1(0.9)
26	1(0.9)

3）141 事例の概要

①女性の妊娠時の年齢

事例の妊娠時の年齢は 14 歳が 3 例、15 歳が 16 例であり、14-15 歳の中学生年代は少なく 13%であった。高校生以上と思われる 16 歳以上が多く全体の 64%であった。

表3.女性の妊娠時の年齢

年齢	実数	%
14	3	2.1
15	16	11.3
16	16	11.3
17	30	21.3
18	34	24.1
19	11	7.8
NA	31	22
合計	141	100

②女性の出産時の年齢

事例の女性の出産時の年齢は 14 歳が 2 例 15 歳が 8 例で 14-15 歳が 7%高校生以上の年代が 90%だった。出産年齢については無回答が少なかった。

表4.女性の出産時の年齢

年齢	実数	%
14	2	1.4
15	8	5.7
16	22	15.6
17	21	14.9
18	53	37.6
19	31	22
NA	4	2.8
合計	141	100

③事例に関わった時何人目の出産だったか

約 9 割が 1 人目の出産であったが、2 人目は約 1 割と多く、10 代で 2 人出産した事例も少なくなかった。

表5.関わった出産は何人目か

出産数	実数	%
1人目	123	87.2
2人目	14	9.9
3人目	1	0.7
NA	3	2.1
合計	141	100

④妊娠に気づいた時の女性の学校や職業

就業者は少なく正職員とアルバイトを合計して約 15%、在学中（中学、高校生、専門・短大・大学生）は 34%で最も多く、次いで無職、主婦がそれぞれ 2 割程度であった。

表6.妊娠に気づいた時の女性の学校/職業

職業	実数	%
中学生	11	7.8
高校生	34	24.1
専門・短大・大学	3	2.1
正職員	2	1.4
アルバイト	17	12.1
無職	32	22.7
主婦	25	17.7
その他	2	1.4
NA	15	10.6
合計	141	100

⑤妊娠中の支援

女性が妊娠中の支援については、家族の支援があったものが最も多く約半数、次いでパートナーの支援が4割であった。パートナーの支援よりも家族の支援のほうが多かった。医療機関や友人の支援は少なかった。「その他」の支援者は保健師、児相相談所職員、民生委員などである。出産まで本人が気づかなかったものが2件含まれている。

表7.妊娠中の支援者(複数回答)

支援者	実数	%
パートナー	54	38.3
家族	74	52.5
友人	10	7.1
学校の先生	7	5
医療機関	12	8.5
不明	27	19.1
支援なし	3	2.1
その他	10	7.1

⑥女性自身と周囲の妊娠の受けとめかた

女性本人の受けとめかたは「肯定的」が最も多く、約6割であった。パートナーや家族については「肯定的」は約3割と少なく、「不明」が多かった。

表8.妊娠の受けとめかた(女性本人)

受け止めかた	実数	%
肯定的	80	56.7
否定的	14	9.9
どちらでもない	18	12.8
不明	28	19.9
NA	1	0.7
合計	141	100

表9.妊娠の受けとめかた(パートナー)

受け止めかた	実数	%
肯定的	42	29.8
否定的	15	10.6
どちらでもない	11	7.8
不明	69	48.9
NA	4	2.8
合計	141	100

表10.妊娠の受けとめかた(家族)

受け止めかた	実数	%
肯定的	43	30.5
否定的	18	12.8
どちらでもない	24	17
不明	47	33.3
NA	9	6.4
合計	141	100

⑦育児期の女性の同居家族

パートナーと同居が最も多かったが56%と約6割にとどまった。実母とは約4割、実父とは約3割の同居であった。その他には祖父母、施設入所、児が乳児院入所などである。

表11.育児期の女性の同居家族(複数回答)

同居家族	実数	%
パートナー	79	56
実母	54	38.3
実父	36	25.5
義母	19	13.5
義父	17	12.1
きょうだい	47	33.3
その他	35	24.8

⑧回答施設／者以外の支援の有無

他機関の支援があったものは約半数と少なく、当該機関のみでの関わりが約半数であった。

表12.他機関の支援の有無

支援	実数	%
あり	66	46.8
なし	62	44
NA	13	9.2
合計	141	100

⑨パートナーの状況

妊娠時のパートナーの年齢は無回答が最も多かった。10 代は約 50%と多く、半数は同年代のパートナーであった。14-15 歳は 6 名 4.2%であり、パートナーも低年齢化している。30 代以上は 8 名 5.7%と少なかった。

パートナーの学校や就業の状況は、女性本人に較べて、正職員は約 3 割、就業者が多く 68 名 48%と約半数だった。在学中は 21 名 15%、中学・高校生は 17 名 12%であった。

表13.パートナーの年齢

年齢	実数	%
14	1	0.7
15	5	3.5
16	5	3.5
17	13	9.2
18	13	9.2
19	18	12.8
20	14	9.9
21	7	5
22	8	5.7
23	5	3.5
25	2	1.4
26	1	0.7
27	2	1.4
28	4	2.8
29	5	3.5
30	2	1.4
31	1	0.7
34	1	0.7
37	2	1.4
40	2	1.4
NA	30	21.3
合計	141	100

表13.妊娠に気づいた時のパートナーの学校/職業

職業	実数	%
中学生	2	1.4
高校生	15	10.6
専門・短大・大学	4	2.8
正職員	41	29.1
アルバイト	27	19.1
無職	9	6.4
その他	8	5.7
NA	35	24.8
合計	141	100

4）事例への支援の状況

支援援を開始した時期は産後からが半数と最も多かったが、妊娠中から関わったものも 36%あった。

産後の支援開始の月数は約 4 割が 0 ヶ月で、早期に支援を開始していた。

表14.支援開始時期

時期	実数	%
妊娠中	46	32.6
産後	70	49.6
その他	11	7.8
NA	14	9.9
合計	141	100

表15.産後の支援開始月数

時期	実数	%
0	30	40
1	21	28
2	8	10.7
3	3	4
4	2	2.7
6	1	1.3
8	2	2.7
9	3	4
10	1	1.3
11	1	1.3
12	2	2.7
13	1	1.3
合計	75	100

表16.支援の継続/終了

時期	実数	%
まだ妊娠中	1	0.7
産後	33	23.4
継続中	85	60.3
NA	22	15.6
合計	141	100

産後に支援を終了した事例は 2 割、支援を継続している事例が 6 割で、継続している事例が多かった。

実施した支援の内容は「家庭訪問」が多く約 7 割の事例に実施していた。次いで他の機関との連携、来所面接が 3-4 割であった。「その他」の支援には乳児院入所、電話相談、乳幼児健診のすすめなどがあった。

表17.実施した支援(複数回答)

支援内容	実数	%
妊婦健診のつきそい	2	1.4
家庭訪問	104	73.8
来所面接	46	32.6
カウンセラーの紹介	2	1.4
ソーシャルワーカの紹介	1	1.4
他機関との連携	50	35.5
パートナーとの関係調整	7	5
家族関係調整	27	19.1
育児サークルの紹介	17	12.1
学業両立支援	3	2.1
その他	49	34.8

5）支援にあたって苦慮した点

自由記述から以下のように非常に育児困難を予測させる支援の必要度の高い事例であることが示された。

- 子どもの放置という通報で介入した
- 車上生活者で、児を保護した
- 外国人でことばの理解が難しい
- 家族すべての精神的フォロー
- 家族に問題があるケース
- 若い人（10 代出産女性）とその世話をしている人の価値観の相違
- 10 代出産女性の大人への不信感
- 妊娠すると退学となる
- 出産まで妊娠を気付かなかった
- パートナーが虐待している

6）回答者（支援者）に対する事例の詳細な面接調査の可否

23 事例について面接調査の受け入れを「可」とする意思表示があった。

4．考察

1）本調査における 10 代出産女性の

特徴

本調査において事例として浮かび上がった10代出産女性は、保健所や保健センター、児童相談所の支援対象であり、問題を抱えている育児困難な事例であった。それらの特徴は「望まない（望まれない）妊娠」「未婚」「若年妊娠」「問題を抱えた家族」など虐待のハイリスク群と重なる。大変困難な事例への支援という視点から考えると、育児の問題が現実化する前の妊娠中からの関わりが3割、産後からの関わりでは産後0ヶ月（退院直後または産科施設入院中など）が4割と多く早くから支援している事例が多かった。困難度が高い事例にはさらに早期からの介入が必要ではないか。また、そういった育児困難度が高い女性や家族は10代に限らず、高齢出産にも存在する。

一方今回の調査では10代出産事例であっても表面的に問題がみあたらない場合には通常の関わりとなり、事例として浮かび上がってこなかった。伊藤[2]は大阪府で「ころころくらぶ」という10代出産女性の自主的な育児グループの支援に関わっている。ここには比較的育児困難ではない10代出産女性が集まり、育児経験によって自尊心を取り戻し、自分たちの変わっていく力を引き出す活動をしている。10代にとっては通常の母親学級などのサークル居心地が悪く、参加しにくい。10代で妊娠することを問題視する視線ではなく仲間同士の支援の場が必要である。問題がない10代出産女性への支援策を検討することはハイリスクグループの支援とは別に必要であると考える。

また、今回の調査では約半数は、他の機関と連携をとっておらず、提供できるサービスが限られてしまう可能性があった。また、妊娠すると学業を中断せざるを得ない現状や多くはすでに高校生年代であっても学校に行っていない状況から学業継続の支援の視点も必要である。

5．結論

141事例の特徴、支援の状況は以下のとおりであった。①女性の57%は妊娠を肯定的に受止めていた　②パートナーは10代が約半数で育児期に同居は56%であった　③支援開始は産後が50%、妊娠中が36%で産後は0ヶ月からが多かった　④他の機関と連携しての支援は47%であった。⑤家庭訪問は73%に実施されていた。　⑥自由記述より「家族すべての精神的支援が必要」「パートナーが虐待している」など支援に苦慮している困難性の高い事例であることが示された。早期（妊娠中）からの継続した支援と、産む決心をした前向きな10代出産女性への多角的な支援が必要である。今後は保健師など支援者への事例の詳細なインタビューを行ない、10代出産女性のとらえ方、連携の必要性などを把握し事例的な分析を行なっていく。併せて問題事例ではない10代出産女性として先行事業の10代の育児サークル（大阪）などでグループインタビューを実施し、問題を抱えた事例として行政機関の支援をすでに受けている事例との違いと

共通点を妊娠期¯産後を通して比較検討し、彼女らのニーズに合致した支援の具体策を提言したい。

文献

1） 戒能民江：平成 14 年度厚生労働科学研究（子ども家庭総合研究事業）報告書（第６／11），主任研究者佐藤郁夫、望まない妊娠、人工妊娠中絶を防止するための効果的な避妊教育プログラムの開発に関する研究、分担研究「出産を可能にする環境整備に関する研究」,501-521,2003.

2） 社納葉子：「うち、産むねん」母になることを選ぶ十代の少女たち　連載第十回　みんなを変えてきた「ころころくらぶ」,月刊　部落解放　526号,108-115,2003.